



只見町ブナセンターだより

<季節のあいさつ>

徐々に雪も無くなり、コブシ、マンサクなど只見町に春の訪れを告げる花々が咲き始めました。この花たちを見ると新年度の始まりを感じます。只見町ブナセンターも新たなスタッフを迎えてスタートをきりました。スタッフ一同、力を合わせて只見町ブナセンターを盛り上げていきます。

===== 今後の予定 =====

【企画展】4月9日(日)～7月17日(月)

「多雪地帯に生きる 只見町の日本海要素植物」



日本海側を中心に分布している植物のことを日本海要素植物と呼びます。その多くは、日本海側の多雪環境の影響を受けており、本来は高木になる種が雪圧を受けて低木化したもの、雪の保温・保湿などの保護作用によって日本海側でより北方まで分布域を広げたものなど様々です。只見町にも多くの日本海要素植物が生育しています。これらの植物は只見町の大きな特徴の1つである多雪環境と強く結びついています。本企画展では、只見町に生育する日本海要素植物の種類・生態などを紹介します。また、町内で日本海要素が観察できる場所、その生息状況を随時展示に追加していきます。

【春の観察会】

「春植物の花園を歩く」

日時：5月3日(祝・水) 12:30～15:00 (ただみ・ブナと川のミュージアム集合 12:00)

観察地：黒谷川沿い ※開花状況によって観察地を変更します。

持ち物：飲み物、雨具、足元は長靴が好ましい ※昼食を済ませてご参加ください。

参加費：500円(保険料込み)

「春のブナ林を歩く」

日時：5月4日（祝・木）10：00～14：00

癒しの森駐車場（県道352号線、松坂峠） 集合9:30

観察地：癒しの森

持ち物：昼食、飲み物、雨具、足元は長靴が好ましい

参加費：500円（保険料込み）

観察会への参加には、事前の予約が必要です。各回、定員30名

お申込み・お問い合わせは只見町ブナセンターまで Tel.0241-72-8355

【GW 臨時開館】

連休中の5月2日（火）はただみ・ブナと川ミュージアム、ふるさと館田子倉ともに開館します。ぜひご来館ください。

===== 活動報告 =====

【座談会】1月22日（日）

「只見町の編む伝統を聞く」

只見町では、身近な植物を材料として、日用品を編む伝統文化が残っています。例えば、マタタビやアケビのツルを使ったザル、ヒロロ（ミヤマカンスゲ）を使ったカゴなどです。企画展「伝統を編む人々～只見町とボルネオ島と」に関連して、編む伝統文化を受け継ぐ町内の方を話し手としてお招きし、お話を聞く座談会を開催しました。

話し手は、明和地区の齋藤文良さん、馬場敏郎さん、朝日地区の酒井洋子さん、只見地区の佐藤恒雄さん、三瓶こずえさんです。はじめに、編み始めたきっかけについて伺いました。敏郎さんと恒雄さんは、子どもの頃から縄よりやワラジづくりなどをよくやったそうです。仕事に就いていた頃はやっていませんでしたが、退職してから再び始めたと言います。洋子さんは、ザル作りをしていたおしゅうとさんから教わりました。当時、編むのは男性の仕事で、女性はほとんどやっておらず、珍しかったそうです。文良さんは、定年後に何かやりたいと思い、先人が作ったカゴやザルを見て「これなら」と始めました。こずえさんは、只見町の伝統文化を受け継ぎたいと様々なことに挑戦している最中です。お話を聞きながら、話し手の方が作ったカゴやザルを見せていただき、聴講者は手にとってつくづく眺めていました。



▲座談会は終始わきあいあいとしていました

町内を中心に22名の聴講があり、ツル細工をされている方も多く、次から次へとたくさんの質問が出ました。材料となる植物を採る時期、質の良い材料の見分け方、材の加工や保存方法、ザルやカゴの使い方などなど。実際に作っている方からしか聞けない貴重なコツを教えていただきました。

最後に、話し手のみなさんに、これからやりたいことなどを伺いました。文良さんは、民芸品保存会の仲間を増やしたい、ゆくゆくは只見町全体がひとつになって民芸品作りを盛り上げ、ユネスコエコパークの一環として町外に発信していきたいという意気込みを話してくださいました。敏郎さんからは、昔は編む技術は「見て習え」で教えてもらえなかったが、民芸品保存会として後継者の育成のために惜しげなく技術を伝えていきたいというお言葉をいただきました。恒雄さんは、覚えたいという人たちをしっかりと育てていきたい。洋子さんは、教えるのは無理だが、編み続けていきたい、アケビヅルで遊びたいとおっしゃっていました。こずえさんからは、町内で活動するまたたび屋の紹介がありました。町内には現在、明和民芸品保存会、朝日マタタビクラブ、只見民芸品保存会、またたび屋の4つのグループがあり、冬期を中心に活動しています。それぞれのグループで新しい人の加入を積極的に受け入れています。会場全体がひとつとなって、座談会を盛り上げてくださいました。参加者からは、満足の声を聞くことができました。

【雪まつり特別企画ミニ観察会】2月11,12日(土日) 「かんじき de 雪上散歩」

去年に引き続き、雪まつりに併せて水の郷只見川公園でかんじき体験を行いました。雪まつりに来場した町外のお客様に只見町の雪と伝統文化を体験してもらうことが目的です。着用したまるかんじきは、雪との接地面積が大きく、特に只見町のような豪雪地帯で使われる形のもので、普通のかんじきよりも幅が広く歩きづらいという声がありました。



▲トチノキの冬芽を観察する

かんじきで雪上を歩きながら、樹木の冬芽や動物の足跡を観察しました。細く尖ったブナの冬芽や対になる三角のカエデの冬芽、べとべとしたトチノキの冬芽など冬芽の違いを観察しました。慣れないかんじきで転びながら、公園内で一番高い丘を目指しました。そこから雪食地形、只見川、只見ダムを見るつもりでしたが、両日ともに空は白く霞んで見通しが利きませんでした。天気の良い日には只見四名山のうち浅草岳、蒲生岳、要害山が望めます。

最後に、スタッフがかんじきを脱いで歩いてみました。案の定、腰近くまで埋まり、かんじきの有効性を実感していただけだと思います。2日間で8名の参加があり、下は小学校低学年から参加いただきました。積雪は1.8mほどまで減っていましたが、只見町の雪の多さとそこに根付いたかんじきの文化などを知ってもらいました。

【写真教室】 3月4日

「只見町の雪を記録しよう～写真による自然記録会」

講師：猪又かじ子氏

只見町の四季の自然を長年撮り続けている写真家の猪又かじ子氏をお招きして写真教室を開催しました。撮影会の最中は天候に恵まれ、青空に眩しいほどの雪景色が映える、外で活動するには最高の日和となりました。写真教室では、猪又氏にそれぞれの被写体をどのように撮ったら良いのかなどのコツを教わりながら、ミュージアムからいこいの森入口までと只見川公園を撮影しました。被写体は冬



▲猪又かじ子さんから指導を受ける参加者

景色から動物の足跡、雪の作り出す造形物や影まで、各参加者が興味を持ったもの全てです。同じ道りを辿ったにも関わらず、それぞれに個性のあるすばらしい写真が撮影できました。

午後には各参加者の撮った写真3点を選んで猪又氏が講評をしてくださいました。その写真の素晴らしい点、ここを注意すると更により写真になるなど、猪又先生からの助言や、参加者側からの質問も出るなど、講評も終始充実したものとなりました。写真にするとのっぺりしてしまったり、白飛びしてしまいがちな雪ですが、ほんの少しのコツや工夫で、ぐっといい写真になります。今回の写真教室には町内外合わせて11名の方が参加されました。自然と親しみ、撮影技術を磨いていただくことができたのではないのでしょうか。



▲午後の写真の講評の様子

【観察会】 3月19日（日）

「冬のブナ林で野鳥を観察しよう！」

恒例の冬の自然観察会は、楡戸の観察の森で行われました。今年は只見町の最大の特徴である多雪を体験することをテーマとし、野鳥観察、スノーシューでの雪上歩行、積雪下の植物の観察と盛り沢山な内容です。

最初に館内で、只見町の雪と多雪が自然環境や生活に与える影響について解説しました。昔は機械の除雪が行き届いておらず、雪の壁に穴を掘って家に入出入りしていたという苦勞話を、古写真を見せながら説明し、外に出ました。双眼鏡を使って要害山を見てみると、雪崩でむき出しになった土やミヤマナラを観察することができました。

観察地に着いて車を降りると、なんと！オジロワシを発見！オジロワシは、翼を広げると2メートルを優に超す、イヌワシより大きな猛禽類です。伊南川上空を飛翔していましたが、トビが威嚇するようにその後を追っていました。めったに見られない、オジロワシを見ることができて、参加者は大興奮です。

早朝に降った大雨で林内の雪はぐずぐずになっており、スノーシューで一歩一歩踏みしめながら歩きました。ここは、ブナの天然林

だった場所をおよそ60年前に皆伐し、その後、ミズナラやクリの混じる雑木林となっていました。およそ30年前に、シイタケのホダ木として選択的に伐採した後、放置したため、今ではブナの二次林になったものです。ブナの冬芽やヤドリギを観察した後、ゾンデ棒という雪崩の遭難者を探す器具で雪の深さを測りましたが結果は、1.38メートルでした。次に雪の下の植物はどうなっているのか、雪を掘ってみました。林床の低木は、雪の重みで地面に押し倒されて冬を過ごします。しかし、雪の下になることで保温され、乾燥から守られるので只見町には、そのような、多雪に耐え、多雪を利用することのできる特徴を持った植物たち「日本海要素植物」が多く生育しています。

観察会には町外を中心に未就学児も含めて19名の方に参加いただき、只見町の冬の自然を満喫していただくことができました。



▲オジロワシを双眼鏡で探す参加者



▲雪の下の植物を見るために雪を掘る



今回の冬の観察会が H28 年度最後の観察会でした。今年度もたくさんの方に観察会へ参加いただきました。ありがとうございます。

「自然首都・只見」学術調査助成金事業成果発表会]1月28日(土)

平成28年度「自然首都・只見」学術調査研究助成事業の成果発表会が1月28日、朝日振興センターで行われ、町内外から約30名が聴講されました。

この助成事業は「自然首都・只見」のブランド確立を目的に、只見町の自然環境、生活・文化について研究調査する研究機関や大学などに「学術調査研究助成金」を交付し、只見町の価値の科学的評価を行うものです。平成24年度から開始され、今年度で5年目となります。これまでこの事業の中で新種のタダミハコネサンショウウオが見つかるなど、只見町の自然環境や生物多様性の豊かさが証明されてきました。

平成28年度は7件の大学等の研究者に助成金の交付が決定しました。成果発表会では以下の内容で助成研究者から一年間の研究成果についてパワーポイントを使って発表いただきました。発表後には質疑応答の時間が設けられ、研究内容について活発に質疑が行われました。中には「再度継続して調査をお願いしたい」という意見があがった発表もありました。

発表会の最後には、新潟大学農学部・教授の崎尾均氏と横浜国立大学大学院環境情報研究院・教授の酒井暁子氏から、「今回の発表を行った研究者は学生から大学職員までおり、また、研究内容も多彩であり、それは只見町が調査研究のフィールドとして優れていると断言していいだろう」という講評をいただきました。今回の助成金で実施された調査研究が、今後、学会や学術論文で発表され、只見町の価値がより広く周知されることが期待されます。



▲成果発表会の様子

表 発表テーマと助成研究者

研究テーマ	発表者(所属)
ヤブツバキとユキツバキの送粉様式と種子生産の比較	片山 瑠衣 さん (新潟大学・農学部)
ユネスコエコパーク(BR)只見の現在を綾、屋久島の例を交えて考える	戸田 恵美 さん (放送大学・院・文化科学研究科)
只見町における高層湿原の分布と群集組成	菊地 賢 さん (希少種保全研究会)
土壌動物の棲みかとしての樹洞 —その形成要因と動物群集の構造	吉田 智弘 さん (東京農工大学)
只見ブナ林の大気汚染環境とブナのストレス診断	斎藤 秀之 さん (北海道大学・院・農学研究院)
只見町における湧水の水質調査	田畑 真佐子 さん (東京理科大学・薬学部)
只見町東西に亘る各地域のスズメバチ類の分布状況	槇原 寛 さん (日本甲虫学会)

【連載：世界のBR (Biosphere Reserves: 生物圏保存地域) No.12】

ユネスコエコパークというのは日本国内の呼び名で、国際的には生物圏保存地域 (Biosphere Reserve: BR) といいます。現在、120カ国に669のBRがあります。ここでは、海外のBRをシリーズで紹介します。只見町がBRに指定された翌年の2015年には新しく20の地域が登録されました。2015年に登録されたBRの1つを紹介します。

The Bromo Tengger Semeru-Arjuno biosphere reserve (Indonesia) ブロモ・テンガー・セメル・アルジャーノ生物圏保存地域 (インドネシア)

ブロモ・テンガー・セメル・アルジャーノBRは、西ジャワ州に位置し、総面積は約40万haになります。この地域は、ブロモ・テンガー・セメル国立公園 (BTSNP) とラデン・ソエルジョ (Raden soerjo) 森林保護区によって構成されています。ここ



▲Googlemapより引用

には1025種の植物が生育し、そのうちの226種はラン、260種は薬用や装飾に使われます。地域内で確認された哺乳類には国際自然保護連合 (IUCN) のレッドリストで絶滅危惧IB類に記載されているものもいます。この場所は、世界的に見ても、国としても、地域としても持続可能な発展の良い実例になっています。ある一部の地域では農業の発展が期待されていて、ウシ、ヤギ、ヒツジ、ウマ、ウサギ、ニワトリなどの牧畜も地域経済に貢献しています。生物多様性の管理や二酸化炭素排出の削減をテーマにした調査活動の計画も立てられています。



次のサイトの文章を和訳して転載しています。

出典

<http://www.unesco.org/new/en/media-services/multimedia/photos/mab-2015/indonesia-bromo/>

=====その他のお知らせ=====

【組織】只見町ブナセンターの2017年度の組織をお知らせします。

センター長・新国勇/指導員・遠藤菜緒子(学芸専門員)・石川貴大・加藤健太・手塚スミ子/只見町役場
総合政策課兼務 事務局長・星一/地域振興係・中野陽介/自然首都・只見学術調査専門員・山本柚季

刊行物の出版のお知らせ

「只見の自然 只見町ブナセンター紀要」No.6 500円



只見町ブナセンター紀要は、只見地域の自然環境の基礎調査をまとめた論文を掲載したものです。今回は、只見町のクワガタ、新たに追加されたキノコムシ類、伊南川水域に生息する魚類、2014年に大量発生したマイマイガに関するものなど動物についての論文が多く掲載されています。また、ユビノヤナギや新たに設置された「ただみ豪雪林業体験・観察の森」についてなど内容が多岐に渡ります。

企画展解説シリーズ

「春植物の生活史—つかの間の季節に生きる色とりどりの花たち—」

500円

平成28年3月～6月に開催された企画展を冊子化した「春植物の生活史—つかの間の季節に生きる色とりどりの花たち」を出版しました。フクジュソウやカタクリなどの春植物は雪深い只見町に春の訪れを知らせる可憐な花たちです。只見町ではありふれた春の風景ですが、他ではあまり見られない植物たちでもあります。本誌では、春植物の一生や生活史戦略、春植物それぞれの種の生態を紹介しています。企画展解説シリーズではありますが、フィールドに持っていても楽しめる1冊です。



<編集者録>

只見町に来て、早2年が経ちました。私が初めて只見に来たのは春の観察会の時期でした。里から見えるブナの新緑、雪解けとともに一斉に花が咲く風景は衝撃的でした。私が経験したことを皆様にも経験をしていただきたいと思います。来館者、関係者の皆様にも、只見町に行きたいと思っていただけるよう頑張りますので、今後ともよろしくお願いします。(石川貴大)

発行 **只見町ブナセンター** 〒968-0421 福島県南会津郡只見町大字只見字町下 2590 番地

電話 0241(72)8355 ホームページ <http://www.tadami-buna.jp>

FAX 0241(72)8356 電子メール info-buna@amail.plala.or.jp

付属施設「ただみ・ブナと川のミュージアム」「ふるさと館田子倉」

開館時間：午前9時～午後5時（最終受付は午後4時まで）

休館日：火曜日（祝祭日の場合は翌平日）年末年始



只見町ブナセンター